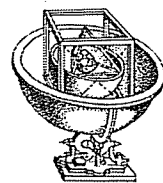


科学と宗教

アナトリー・A・ログノフ

松本幸重 訳



現代の研究資料によると、宗教が生まれたのは今から約五万年前の石器時代のことです。人間も原始社会もかなり高い発展段階に達してからでした。宗教の発生は、何よりもまず人間の知性の高い水準、つまり、理論的、抽象的思考が形成されはじめた水準と結びついています。宗教的な考えの発生についてはさまざまな説明を試みる事が可能です。しかし、どうしようもない事実として残るのは、このような考えが地球上の、お互いに十分に離れたさまざまな地域の人々のところで発生したこと、そして驚くべきことに彼らのこういった考えの本質がほ

とんど同一だということです。その時代からかなり長い時間が経過し、人類はひじょうに高度な発展段階へ達しました。しかし、宗教的な考えは消滅しないどころか、むしろ逆に人間の意識にさらに深く浸透しています。これらすべてのことを説明できるのは、宗教的な考えは人間の欲求であり、人間の精神的本性そのものに固有であるということによつてだけです。だからこそ、宗教的な考えを根絶しようとするいかなる試みも、結局は失敗する運命にあるのです。しかしながら、もしこれらの宗教的な考えが力づくで植えつけられるならば、人間の本性

に反することになるでしょう。最も偉大な教師としての実生活がはっきりと示しているのは、宗教的な考えはひじょうに多くの人々の人間精神と理性の自然の欲求だということことです。

多くの哲学者は、社会と教育の発展につれて宗教は消滅するだろうという意見を述べました。とりわけ宗教の消滅は社会主義思想の発展と結びつけられました。社会主義思想は一連の工業的に発展した国でほんとうに実現されました。にもかかわらず、そのことがこれらの国における宗教的な考えの衰退をもたらすはしませんでした。問題は、われわれが目に見えているように、これらの哲学者たちが考えたよりもはるかに複雑です。明らかに本質は、人間の精神的本性そのものに、人間の思惟にあるのです。キリスト教徒たちは完全な権利をもって、この性質は造物主によつて各人に組み込まれたのだと見なすことができます。しかし、同時に、各人は選択の自由をもっています。宗教的な考えは長期間にわたり、人間についても、人間を取り巻く世界についても、すべての観念をカバーし、形成してきました。私が思うには、ま

さにこの点で、教会は造物主の基本的思想を理解せず、自己にとつて破滅的な道に踏み出したのです。造物主は人間に認識のための強力な創造的本質を組み込み、これによつて人間を人間たらしめました。そして教会は、人間に組み込まれたまさにこの主要なものを一掃しようとしたのです。ここに教会の悲劇的な過ちがあります。まさにこの過ちに基づいて、古代ギリシャの哲学者たち——ヘラクレイトス、デモクリトス、エピクロスが述べた思想との矛盾、ときにはこれとの闘争が生じはじめたのです。私の見解では、これは宗教と科学の闘争ではなく、教会と科学的観念との闘争でした。ひじょうに残念なことには、この闘争は教会の迷妄のためにきわめて長い期間続きました。カトリック教会がアリストテレスを自然の問題における教会にとつての最高権威として承認したとき、とくに深刻な時代が訪れました。こうしてドグマが生まれ、これが科学の発展に枷をはめました。しだいに、しかし絶えず教会の断罪者的な活動の強化が進行しました。十三世紀、愛と慈悲の宗教を普及させるためにという名分のもとに、教皇の異端審問が展開されたあ

とで、トマス・アクィナスはこう書きました。「教会に
関して言えば、教会は慈悲に満ちており、道に迷った者
たちを改宗させようと努めている。そのため、教会はす
ぐには断罪しない。しかし、使徒が教えているように、
一度目と二度目の説諭のあとで断罪する。もし異端者が
そのあとも強情を張るなら、教会はその者の改宗に期待
をかけず、他の者たちの救済を考え、その者を破門によ
って教会から排除し、さらに俗界の裁判官に引き渡す。
裁判官がその者を死によって世界から排除するためであ
る。もしすべての異端者がこのようにして絶滅されるな
らば、これは神のご命令に背くことにならないだろう」。
何という恐るべき考えであり、行動でしょう！ これら
は人類の発展に、その知性と精神の発展にとつともない
害を与えなかったでしょうか。何しろ、実質上これらは
人間に思考し、真理を探究するのをやめることを要求し
たのです。つまり、教会はまさに造物主が人間に創造的
本質を組み込んだことを理解できなかったのです。教会
は自己の最高の精神的牧父たちにおいて、事実上、造物
主の思想から離れたのです。異端審問の時代が始まりま

した。これは一二五二年の教皇インノケンチウス四世の
大勅書で正式に認められました。この大勅書で、異端審
問のさいに拷問を用いてもよいことが公式に指示され、
認可されました。異端審問裁判所の活動が始まり、自
動的に大衆的な密告を生み出しました。この密告では個人
的な恨みを晴らすことができわめて頻繁に起きま
した。断罪には全財産の没収が伴ったので、断罪された
者の財産によって教会が富を増やす可能性が生まれまし
た。異端審問をつうじて教会は人々の知性に対する独占
的な権力を確立し、国家におけるみずからの地位と影響
力を強化しようと努めました。

異端との闘争はカトリック教会によって何世紀にもわ
たつて行われました。自然科学の発展は、すっかりした
観察や実験に立脚していなかったため、最初のうちはカ
トリック教会にとつて何ら深刻な危険にはなりませんで
した。科学は古代のすぐれた哲学者たちの思想に追隨し
つづけていましたし、しかもこれらの研究は時として形
式的、スコラ的な性格を帯びていましたから、聖職者た
ちから見ても、キリスト教の教義の根本には少しも触れる

ことがありませんでした。少し時代が進んで、錬金術が
ある程度の普及を見たとき、錬金術師への迫害が始まり
ました。一一六三年、教皇アレクサンデル三世は大勅書
を発し、聖職者に「化学または自然法則の研究」を禁じ
ました。当時、このような活動に携わっていたのはだい
たい聖職者だけでしたから、この禁令は事実上科学の発
展を停止させました。一一一七年、教皇ヨハネス二十二
世が発した大勅書では、化学を研究することが「悪魔の
七つの術」の一つとして禁じられました。しかし、科学
の発展を止めることはもう不可能でした。これは社会の
必要によって呼び起こされたものであり、また、その発展
は人間の知性の本性、すなわち認識欲によってもたらさ
れたものだったからです。

古代の学者たちの周囲の世界についての観念に立脚し
ていたキリスト教の教義は、新しい科学研究の圧力を持
ちこたえることはできませんでした。この面できくに卓
越した役割を果たしたのは、コペルニクスです。彼は一
五四三年に刊行されたその主著『天球の回転について』
で太陽中心説を唱えました。この説によれば世界の中心

にあるのは太陽です。教会はコペルニクスの学説の革命
的性格をすぐには理解できず、このため彼の本が禁書に
なつたのはようやく一六一六年になってからでした。こ
の時には、すぐれた思想家のジョルダーノ・ブルーノや
ガリレオ・ガリレイがコペルニクスの学説をすでに発展
させていました。教会はこの研究方向がキリスト教の教
義にとって直接的な危険をもっているのに気づきまし
た。しかし実際には、宗教としてのキリスト教にとって、
いかなる危険もありませんでした。危険があったのは、
教会が根拠もなく教義の中に含めた命題にとつてだった
のです。コペルニクスの本は一八二八年まで禁書になっ
ていました。

コペルニクスの学説の継承者たちと教会の闘争で最初
の犠牲者になつたのはジョルダーノ・ブルーノで、彼は
一六〇〇年に火刑に処せられました。ブルーノが告発さ
れたのは彼がコペルニクスの追隨者であつただけではな
く、キリスト教信仰の一部の命題に同意しなかったため
でもあります。こうして異端は教会によって弾圧された
のです。まもなくガリレイに対する教会の闘争が始まり

ました。これは一六一六年からガリレイが一六四三年に死ぬまでずっと続けられました。一六一五年、枢機卿のペラルミンはガリレイの支持者にこう書きました。「もし、地球の運動についての仮説と太陽の不動がすべての現象を離心円と周転円を採用するよりもよりよく描き出すことができるというなら、それはまったく問題のない言であって、何らの危険ももたらさない」。ガリレイには自分の科学的見解と絶縁することが提案されました。なぜならば、枢機卿の意見によれば、地球が太陽の周囲を回っていることを認めるのは「聖書の命題が虚偽であることを示して、神聖な信仰に害をおよぼすことを意味するであろう」からです。コペルニクスの学説の本質に關して決定が採択されましたが、そこにはこう書かれています。この学説は「哲学的に愚かしく、無意味であり、形式的に異端である。何となれば、この学説は聖書の教えにその多くの箇所でも矛盾しているからである。聖書の言葉の意味に關しても、神父と神学者たちの共通の解釈に關しても」。ガリレイは、異端審問のためにフィレンツェからローマに呼び出され、厳しく次のように警

告されました。「地球が太陽の周囲を運行し、太陽が世界の中心に止まっていて、東から西へ運行しないという、コペルニクスの作とされる学説は、聖書に反する。ゆえにそれを擁護することも、保持することも、してはならない」。フィレンツェに帰還後、ガリレイはコペルニクスの学説についてその虚偽と異端性を指摘しましたが、しかしこれだけではやはり、彼が心からこの学説を放棄したと教会が信じるには不十分でした。一六三三年、教皇ウルバヌス八世の命により、ガリレイは再び裁判所で審問を受けました。ガリレイはこの時すでに七十歳で、自説を曲げないときに自分を待っているものを理解し、自己の見解を放棄する決心をしました。彼は異端審問裁判所で次のように言明しなければなりませんでした。「誠心誠意、偽りのない信仰をもって、前述の思い違いと邪論、および聖なる教会によって前述されたあらゆる唾棄すべき思い違いと分派的意見全般を私は放棄し、呪詛し、これを憎悪すべきものと宣言する」。これ以降、ガリレイの科学研究は不可能になりました。彼はこのあと約十年生きましたが、死の少し前になってようやく監

禁を解かれました。自然科学の創始者の一人だったこの大学者はこのような試練に遭わねばならなかったのです。

弾圧のほか、教会はコペルニクスの学説に系統的な批判を加えました。ここにそういう批判の見本が一つあります。キアラモンティの著作に次のような箇所があります。「運動する能力をもつ動物は手足と筋肉をもっている。地球は手足も筋肉ももっていない。したがって、地球は運動することができない。土星、木星、太陽、その他の惑星を動かしているのは天使たちである。もし地球が運動するなら、その中心には、それを動かすような天使がいなければならない。しかし、そこに住んでいるのは悪魔だけである」。こういう論証法のすべてが証明しているのはただ一つ、教会は実質上、愚鈍と蒙昧を擁護していたのであり、それによって自然科学の発展における重大なブレーキになっていたということです。コペルニクスの学説の支持者たちは大学から追放され、自己の著作を刊行することが許されませんでした。コペルニクスとガリレイの著作に立脚した地球の地質学に關する著

作でさえも、焚書処分にされました。十七世紀の初め、パリ大学の神学部は、ド・クラワ、ビトー、ド・ピリオンの三人の地質学者を大学とパリから追放し、彼らの著作を焼却する決定を採択しました。十八世紀の半ばでさえ、大学者のビュフォンは地質学に關する自分の著作を否定し、おおよけに次のように声明することを余儀なくされました。「私は、聖書のテキストに異議を唱えるいかなる意図ももたなかったこと、自分が時間に関しても事実そのものに関しても天地創造について聖書に述べられている一切のことをもつとも確固として信じていることを声明する。私は、地球の形成に關して自分の本に述べられている一切のこと、および一般に、モーセの叙述に矛盾する可能性のある一切のことを否認する」。

学者を迫害したのはカトリックだけではありません。プロテスタントも迫害しました。エンゲルスはこう書いています。「プロテスタントは自然の自由な研究の迫害ではカトリックをしのいだ。カルバンは、セルベツスが血液循環の発見のすぐ間近まで迫っていたとき、彼を火刑に処した。しかも、二時間も生きながら焼くように命

じた」。セルベツスの告発に少なからざる役割を演じたのは、彼の地理学に関する研究でした。セルベツスが刊行した地理学に関する著作に、ユダヤの地の自然が、彼が目にしたとおりに、乾燥した、収穫の乏しい、貧しい地方として描かれたのです。これらのことはすべて、容易に確認できたでしょう。しかし、これらの事実は、「必然的にモーセの言葉への疑い呼び起こし、聖霊を甚だしく侮辱するもの」と評価されたのでした。

聖職者たちは学者を迫害しただけではなく、その本や著作まで焼却しました。焼却されたのは新しい著作だけではなく、以前に刊行された貴重な本までではありませんでした。以前に刊行された貴重な本まで焼かれ、これによって人類の文化遺産が消滅させられたのです。枢機卿のヒメネスはグラナダで膨大な量の、文化的にひじょうに貴重なアラビア語の書物と手稿を焚書に処しました。トルケマードはヘブライ語の数冊の聖書を焼くように命じ、後にはサラマンカで六千冊以上の本を焼却しました。これらの本は「ユダヤ教、魔術、魔法、その他の迷信に冒されている」からだというのです。われわれが目になっているのは、聖職者たちが数世紀に

もわたり科学に対する積極的な闘争を行ったのに、しかし教会は無力であり、すでに自然科学の発展を止めることができなかったということです。科学の力強い前進をJ・V・ドレーパーは次のように描写しています。「笏杖は別の手に移った。自然はあらゆる方向で研究された。そして至るところで、新しい研究方法が思いがけない、すばらしい成果をもたらした。苦むした聖堂の廃虚の上には、近づきつつある昼に驚愕し、目のくらんだ聖職者たちが重々しく座り、周囲の世界と光に目をふさぎながら、過ぎ去った夜の思い出にふけっている。かつての幻影と迷妄の回復を夢見ながら、そして、大胆にあまりにもそばまで近づいてくる攻撃者たちすべてを憎々しげにけとばしながら」と。

ロシア正教会もまた積極的に、ただし、厳しさの点では少し劣りますが、科学と闘争を行いました。正教会の強い影響のもとで、しばしば教授科目から、学生の自然科学的な世界観の形成に影響を与えかねない科目のすべてが外されました。そのさい、それらの科目の教授たちも大学から追われました。一八二〇年にはカザン大学で、

カザン教育管区の監督官が「造物主がみずからに似せて創り給うた人間を解剖学の標本に使用し、人間をばらばらにしたものをアルコール漬けにして保存するのは忌まわしく、神に背くことだという申し入れをした。この結果、棺桶が注文され、その中に乾いた標本とアルコール漬けの標本のすべてが収められ、追悼祈禱のあと、盛大な葬列を組んで墓地へ運び、埋葬した」のです。一八五〇年には教授科目としての哲学がロシアの大学で廃止され、神学の教授たちの管轄に移されました。大学に哲学講座が復活されたのはその十三年後のことでした。とりわけ、正教会の危惧を呼び起こしたのは地質学の研究です。府主教フィラレートは地質学の本についてこう書いています。「球全体がその軸の上で回転した。だが、軸はどこから現れたのか？　そして誰が回転を起こしたのか？」。こういう問いが聖職者たちに生まれたのは、地球の回転に関してでした。正教会の科学との闘争は、聖職者たちの完全な科学的無知を反映していました。しかし、しだいに正教会も科学との相互関係では慎重になってきました。

ちょうどこの頃、ウラジーミル・ソロビヨフ教授が「全統一的」の哲学を提唱しました。ソロビヨフの科学的見解によれば、「純粹知識の全統一的」は宗教、哲学、具体的諸科学を包括し、統一しなければなりませんでした。しかし、ほかでもないこの思想方向が、いわゆる民主的世論に批判されたのです。なぜなら、この方向は彼らの革命的志向と矛盾したからです。レーニンはこう書きました。「偶然ではなく、必要のために、わが国のすべての反応、とりわけ自由主義的な（道標）派や立憲民主党員の（反応は、宗教に（飛びついた）。単なるステッキだけでは、単なる鞭だけでは足りない。ステッキは何しろ割れているのだ。道標派は先進的ブルジョアジーが最新式の思想的ステッキ、精神的ステッキを入手するのを助けているのである」。ロシアの愛国主義的インテリゲンチアの一部が結集して、一九〇九年から『道標』（「ヴェヒ」）という題で論文集を刊行しはじめました。この論文集では実質上、社会発展の漸進的な道が主張されました。道標派はとくに一九〇五―一九〇七年の革命を誤りと見なし、これは社会主義的傾向の「サークル的」な

「インテリ連中」の活動の産物だったと主張しました。インテリゲンチアのこの部分のイデオロギーは、道標派の目には歴史的に不毛であり、有害であると映ったのでした。その後ロシアで展開され、大量の人々の非業の死を招いたプロセス、さらに、現在進行しているプロセスに照らしてみると、道標派はきわめて先見の明のある政治家たちであったとはつきり断言できます。しかし、時機は失われ、すでに彼らは迫りつつあった革命の大波に抗することができなかつたのです。民衆は苦しい生活をしており、すでに革命的な呼びかけにすっかり夢中になっていました。民衆はこの呼びかけに自分たちの救済を見ていたのです。もし、革命家たちによってどのような救済が用意されているのか、民衆が理解できていたら！ ソロビヨフの「全的統一」の思想、これは全人類の問題のもっとも自然な解決法です。なぜなら、本質において、宗教と科学は人間自身の奪うべからざる特質であり、したがってそれらは人類が存在するかぎり、つねに存在するだろうからです。もちろん、これはすべての人が宗教を信じるようになるということではありません。

ん。ただ一つ、疑いがないのは、人々の間の宗教的世界観は生きており、将来も生きるだろうし、科学はその世界観を否定も確認もしないということです。なぜなら、両者は人間精神の別々の分野をカバーしているからです。これまで私は、いくぶん断片的に、教会と科学の闘争の若干の事例に触れてきました。科学の成果が議論の余地なく、疑問を呼び起こさない以上、科学はがんばりとおした、科学はこの闘争で勝利したと充分な根拠をもって見なすことができるでしょう。これを認めないのは困難だと私は思います。しかし、これは、宗教的教義の破綻が証明されたということでは絶対にはないのです。そのような結論を出すことは不可能です。それどころか、宗教と科学は本質的には、いまだかつて衝突したことがありません。なぜなら、教会と科学の闘争は、宗教と科学の闘争が起きていることを意味しなかつたからです。宗教も科学も、具体化されるのは、人々によってです。何しろ、人々には真理が開かれていないのです。このため、彼らには過ちがつきものです。たとえば、科学には、自

然に無縁の立場を掲げ、擁護した時代がありました。しばしば保守主義も科学の発展を抑えました。しかし、そのことから、それが科学の罪だということには決してありません。罪と責任は人々に、そしてつばら人々にだけあるのです。私の深く確信するところによれば、今日、「全的統一」がとくに必要なのは、改革、それもいつも革命的性格の改革によって疲労困憊させられたわが国においてです。私の確信するところでは、ロシアが必要としているのは、法を厳守しながらの漸進的發展です。その場合にのみ、ロシアは、長年にわたって権力の座にあつたまったく平凡であり聡明でない指導者たちのために陥った深淵から脱出することができます。もちろん、「全的統一」は自然にやってくるわけではありません。これは長い時間を必要としますし、関係するのは生活の物質的改善だけではありません。精神的再生にも関係します。これは教会の積極的な関与なしには考えられません。私はロシアで進行中のプロセスについてここで簡単に触れましたが、しかし私は、人間活動の精神面はこの国でも特別の関心が必要だと思います。なぜなら、この

面は人間活動のどの側面にもまして、つねに関心が必要としますし、大体において永遠に解決されることが決してありえないからです。人間の精神教育は、教会の積極的関与と社会の国家的支援のもとで初めて可能です。もし科学と宗教の「全的統一」について論ずるならば、せめて簡単にでも科学と宗教の活動分野の特徴づけをする必要があります。科学も宗教も人間のために、人間の名において存在します。もちろん、人間社会発展の歴史を見るならば、科学も宗教も、時には人間に奉仕しなかつたこともあります。しかし、これが起きたのはやはり、人々によって指導される教会と国家が、庶民の利害とかけ離れた偏狭な利己主義的な利害に則っていたという同じ理由によるものです。もちろん、これは教会の権威を高めませんでした。人間の生活における宗教のもっとも重要な役割を理解しつつ、教会は、社会に蓄積され、その調和を乱している精神的欠陥にタイムリーに気づくほど十分に聡明でなければなりません。宗教と科学は人々のためにひじょうに多くのことを共同ですることができ

人間の精神的本質の形成、これはもつとも重要な、そして同時にもつとも困難な問題です。社会発展の各段階におけるその成功的な解決には、すべてとは言わないまでも、ひじょうに多くのことが左右されます。これは、精神教育だけが人格をつくるということからも、理解できます。過去を振り返り、われわれが今日もっているものを考えると、完全に明らかになるのは、ロシアの民主的インテリゲンチアは長期間にわたって結局は社会を、創造ではなく、破壊へと導いたということです。そして、とくに驚くことには、彼らはこれらすべてのことを、民衆の生活をよくしようと考えるながら、最良の動機から行ったということです。革命的民主主義者のペリンスキー、チエルヌイシェフスキー、ドブロリユーボフ、ゲルツェン、オガリョフ、その他多数の人たちは、民衆の苦しい生活を目にし、民衆を救おうと望みながら、実質上、ロシアに革命を呼びかけ、農民には斧を取るよう呼びかけました。若い世代は彼らの名前でもちきりでした。ゲルツェンは晩年になってようやく、革命の道が創造の道でないことを悟りました。一八六九年に刊行さ

れた著作『古い同志へ』の中で、彼は、テロルと暴力によつては何も創造することができないことを理由に、国家廃絶、社会革命への呼びかけに反対しました。しかし、事はすでになされたあとで、ゲルツェンの革命的扇動はすでにその結果をもたらしていました。こうして、国民の薄い層——インテリゲンチアに属していた教育のある人々は、国民のためであるとして、最良の動機から、岩を山から付き落としました。ロシアの大作家ドストエフスキーは、これらの社会改革者たちの思想が何をもたすかを天才的に予見し、彼らの精神的本質を小説『悪霊』で見事に描きました。作家ははっきりと、革命的实践が、目的は手段を正当化するという深く不道德な思想の勝利につながることを見ていました。人間の魂の奥底を研究しながら、彼は、社会的手段は悪との闘争のためには不十分だと考え、人類のための精神的支柱を神の思想に求めました。ドストエフスキーは書きました。「悪は人類の中に、医師たらんとする社会主義者たちが予想しているよりも深く隠れている」と。残念ながら、この偉大な作家にして思想家だった彼の声は十分に伝わりま

せんでした。なぜなら、社会の革命的改造についてのものと素朴な思想が青年たちの未熟な知性をかき乱していたからです。これらのすべてはひじょうにロマンチックに見えたので、若い令嬢たちまで引きつけたほどでした。しかし、おびただしい血が流されたとき、ロマンチズムは跡形もありませんでした。だが、時すでに遅し。暴風は国中を荒れ狂っていました。なぜ、こういったことが起きたのか。ここでは多くの原因が一つに合わさっていました。私は一つだけ、ひじょうに本質的な原因に触れておきます。この原因はここで検討されているテーマに直接かわっているからです。残念なことに、教会は国民の中にしだいに蓄積されていたプロセスをタイムリーに理解することができず、評価しなかったのです。私の意見では、ロシアでは教会は長いあいだ、科学に対する自己の態度を立て直すことができず、そのため、この期間に科学において開かれた大きな成功を背景にして、教会は若い世代に積極的に影響を与える機会を失ったのです。まさに青年たちは実質上、教会の外にあったのです。何しろ、青年たちは革命の主要な資材でした。

教会はソロビョフの「全的統一」の思想を支持しました。しかし、時機はすでに失われていました。もしこれにさらに補足的な諸要因、および国家権力の弱さと英知の欠如を加えるなら、ロシアが革命に向かって転がり落ちていったことはまったく明らかになるでしょう。しかし、今これを書くのはほんとうに簡単ですが、当時こういったことのすべてに気づくことができたのは相当に聡明な人たちでした。そういう人たちはいましたが、しかし、残念ながら、われわれのいわゆる民主主義者たちによつて何十年間も急回転させられた歴史の車輪を止めることには成功しませんでした。そして、この車輪は彼らも一掃したのです。現在、ロシアでは、ほとんど同様のプロセスが進んでいます。以前のロシアと同じように、またしても民主的インテリゲンチアが、もつとも、彼らは知的には大幅に薄められ、より素朴ですが、やはり国民のためだと称して（これが本心であるかは、疑わしい）、国を深淵へと押しやっています。自分たちもそこで破滅することを理解せずに。インテリゲンチアの創造的な部分は自分たちの努力を集結することができません。なぜなら、

まさにこの人たちはつねに、群集的な精神にまったく無縁なのです。彼らはめいめいが独立独歩です。ここに、平時における彼らの創造力があります。しかし、ここに、迫り来る激動のプロセスに直面したときの彼らの大きな弱点があります。彼らは、危険を目の前にして結集できるでしょうか、それとも再び、以前と同じように、歴史ののけ者になるのでしょうか。教会はこの国民の苦難のときにあたり、善の勢力の結集に役立つような積極的な調停の立場をとっているのでしょうか。今のところ、教会の声はあまりにも低いのです。ただ一部の聖職者たちだけがこの迫りつつある危険を理解し、積極的に自分の力のかぎり国民と祖国の幸せのために行動しています。教会は問題から手を引くべきではありません。なぜなら教会はつねに民衆と共にあらねばならないし、民衆とのみ、あらねばならないからです。われわれが目にしてゐるのは、社会の精神生活において、社会の鎮静化において、庶民の利益のための団結の探求において、宗教と教会の役割がいかに大事かということです。このような道徳的に純粋な勢力は社会にはほかにありません。それゆ

えに、教会が造物主の意思を実行し、民衆の利益のために行動することができるか、それとも事態を静かに観照しつつ第三者の立場に立つことになるかは、教会にかかっています。もし教会が社会で生じている問題の水準に立つなら、その権威は増大し、したがって民衆の精神的再生は速まるでしょう。すべては教会の英知と先見の明に、民衆と共に、ただ民衆とのみあるその能力にかかっています。あるいは今回は、われわれの歴史が指導者たちも含めてすべての人に教えるかもしれません。われわれには一つの道しかない、それは緊急問題の解決に人々を結集することだと。なぜなら、社会に生じている権力機構同士の非妥協的關係には未来がありません。この道では誰にも勝利がありませんからです。人々の利益のための調和と妥協の道、生じている野心の克服、漸進的發展——これこそ唯一、われわれに必要なものです。未来の歴史は、そしてこれは今日のすべての指導者が理解しなければならぬことです、各人の行動に評価を下します。そしてもし彼らが歴史に汚れた足跡ではなく、しかるべき足跡を残すことを望むなら、今こそ考え直す時

です。明日ではもう遅いかもしれません。もちろん、場当たりの考えからたまたま権力の高い地位に就き、状況を個人的目的のために利用しようとしている人たちに、こういったことはすべて取るに足りないことです。しかし、名譽、良心、誠実、祖国への奉仕といったことを単なる言葉と知らない人たちは、やはりこのことを理解し、結論を出すべきです。

次に、科学に目を向けましょう。科学の本質はどこにあるのでしょうか、科学ではすべてが、何度も検証された事実立脚しているというのは本当でしょうか？あるいは科学には信仰に立脚した何かが存在するのでしょうか、あるいは科学者は仮説に基づいて話すことをどれほど好むのでしょうか？科学は、われわれを取り巻く物質世界を、生命のない自然と生命のある自然の両方の物質世界を研究しています。生命のない自然の世界は、ミクロの世界から全宇宙まで広がっています。科学が発見する法則は普遍的で、地球上でも、全宇宙でも同一です。自然法則のこの共通性は、地上の条件のもとで実験と観察データに立脚して法則を発見し、これらの法則の

助けを借りて全宇宙を研究することを可能にしています。とりわけ驚くべきことは、自然が認識可能であり、自然の根底には基礎的な法則が横たわっており、人間はそれらを科学技術の発展における進歩につれて発見していくということです。科学は、自然が認識可能であることを説明できません。これは仮説なのです。もう一つの基礎的な仮説が、因果律です。この仮説によれば、結果は原因に先立つことはできません。科学が研究するすべてのものは物質的自然をもっています。この事情もまた、基本的な、エネルギー保存則として定式化されています。この法則の骨子は、エネルギーは消滅せず、新たに発生しない、それは一つの物体から別の物体に、あるいは一つの形態から別の形態へ等量で移行するということにあります。そういうわけで、科学には、科学の基礎には、基礎的な仮説が横たわっており、これらは絶えず入念な点検を受けているのです。科学は非物質的な現象を研究しません。これらの現象は科学の視野には入っていません。科学の見地からは、そのような現象は存在しないと言うことも可能でしょう。しかし、別の側からは、同じ

権利をもって、科学はこれらの現象に関係がない、これらの現象は科学の外にあるからだと言うこともできません。まさにそのために、われわれが言えるのは、科学は宗教を確証しないし、これを否定することもしないということです。したがって、宗教の教義が科学的成果を受け入れ、これらを宗教的世界観の構成部分として見なすならば、宗教と科学の間には矛盾はありません。過去の闘争の本質は、われわれが見てきたように、宗教が物質世界の領域に、すなわち、科学の領域に侵入したために起きました。

しかし、私を知るかぎりでは、そのような闘争は仏教にはありませんでした。この宗教教義がキリスト教より何世紀も早く誕生したにもかかわらずです。あるいはこれは、仏教では愛の宗教が特別の地位を占めていることによって説明できるのかもしれませんが。この側面は、とくにブッダの言葉に強く表れています——「勝利は憎しみを生む。敗者は不幸だからである」、「善意によって怒りに勝ち、善によって悪に勝ちなさい」。善の偉大さについてのブッダの言葉が恐らく、仏教において布教者た

ちと哲学者たちとの間に矛盾が生じるのを許さなかったのでしょうか。ここではきつと、反対に、お互いを豊かにすることが進み、これは仏教と哲学の双方の発展に役立ったのでしょうか。この例がはっきりと示しているのは、宗教教義と科学的観念は、お互いを豊かにしながら、静かに共存できるということです。だから、きわめて多くの大学者たちが敬虔な信仰者であり、したがって宗教的世界観と科学的観念が個人の中にまったく静かに共存し、お互いを少しも邪魔していないのは、偶然ではありません。だから、同じような調和が社会でも起きないという深刻な根拠はまったくありません。これらの人間精神の特性が造物主によって人間に組み込まれている以上、このような調和はなおさら自然なものです。

最後に、私がこの複雑な問題の本質を真剣に考える機会になった貴重な対話に対して、池田大作博士に深い感謝を表します。私の講演を傾聴して下さった創価大学の教授、教員、学生みなさんに御礼申し上げます。

一九九三年九月十五日

文献 I・A・クルイベリョフ著

『宗教の歴史』

モスクワ、1976年発行

(アナトリー・A・ログノフ・物理学者、前モスクワ大学総長)

(訳・まつもと ゆきしげ)